

令和4年7月5日

政治倫理審査請求案件

事実認定における説明書

調査対象者 山下幹雄 提出

令和4年4月22日各派代表者会が開催され、令和4年度の議会人事案件が慣例に従い、各会派よりのエントリー制で決定されていく流れの中での出来事です。

監査委員については、議会の推薦で市長提案議案となります。ここも他の役職と同様のエントリー方式で進められ、複数会派からのエントリーが出された場合は、当事者間の話し合いによる調整が先ずは行われます。調整が不調の場合は代表者会出席者の採決で決定される運びであると認識していました。今回、最大会派である令和あさひより坂江章演議員がエントリーされました。会派の所属員数で大きいものから順次エントリーが進む制度がとられており、最後に私(山下)に発言機会が回りました。そこで、今期(平成31年度より令和4年度)議会内の運営を混乱させた政務活動費不適切受給事件の表面化等一連の騒動時に議長職を務め、会派(当時名フロンティア旭)内積立金流用による議員辞職も含め審議決着不透明(事件性の判断、関係者の懲罰審査及びその決定方法(坂江議長の嚴重注意報告のみ))

のなか一旦終結となりました。

政務活動費不適切受給事件の表面化は、会派内部積立金流用による議員辞職案件より約5か月後に議会外の当時を知る関係者の調査資料提供により表面化し、一定の調査は実施されましたが、前段でお示しした通り懲罰に関する議会審査手続き無しで議長注意のみとなっています。当時の調査の中には、坂江章演議員自身の政務活動費内調査研究費支出(金沢市視察費支出)も指摘され自主返還という形式で特に審議されず通過しています。こうした一連の議会内騒動の当事者でもあり、本市監査委員の適任者ではない旨を各派代表者会議に於いて、エントリー時に議論できないか議長確認をしましたが、出来ない旨を慣例によるものとし却下されました。そこで、意義を唱える意味で私も敢えてエントリーをしました。その思いから会議の休憩中に雑談(独り言)として会議内で発言が許されない上記の政務活動費不適切受給事件からの一連の事項について発しました。この時、令和あさひの松原代表より「休憩中なら何を言ってもいいのか。」の声が上がり対抗しました。その間のやり取りは口論でありましたが、私の対応に松原代表は、「嘲笑的」表現を挟みながら対応をしていました。(ここは、主観的表現になりましたが、視聴覚的表現とするなら「ニヤニヤ」というべきかもしれません。)

ここで、議長よりこの口論に対し両者に退席を命じる声が上がりました。この命令により両者同時に立ち上がり私は東側出入り口に向かう行動をとりました。(両者同時に立ち上がった事実につきましては、会議を通して録音がされている事務局データに目撃者



からの音声で確認できます。)

※その場における移動関連は概略図でお示ししますので、別紙ご参照ください。

互いの口論の中、松原代表の顔が迫り近づきました。(録音データ中に関連発言あり)

その際、その行為に対する防御の形として身体の中心部で押し返そうと接触に至る事となりました。このことについて目撃者は録音された音声の中で、「自分の位置から接触したかは見えていなかったが、腹を突き出して押したように見えた。」と発言しています。数十秒間の接近時状況は、議会事務局長が松原代表横に立ち両者の間に手を入れ、片渕議長が山下側後方に回り、互いの距離確保を促す行為がありました。その後、両者席に戻り休憩中ではありましたが、会議の再進行に関わる議長見解が出されました。(この際のやり取りは録音で確認できます。このやり取りについては特に意見陳述の場にて説明します。)

その後、会議が再開され代表者会の会派代表の入れ替え(山下から花井議員)、エントリーの辞退を宣言し、合わせて会派内の合意が得られれば、代表の交代も含め反省の意を示したい旨を表明し一連の結末をはかる行動としました。

以上

(別紙)

